叙事詩の宗教哲学

── Mokṣadharma-parvan 和訳研究 (III) ──

茂 木 秀 淳

〈Mokṣadharma 和訳〉[1]

[174章] (D181章, 6745-6764)

ユディシュティラは言った。

(1) もしも,(布施は) 与えられ, 祭式は行なわれ, そして苦行は実践され, また師匠への[2]従順も存在するならば, 祖父よ, それから生じるものを (?) [3]私に語るべし。

ビーシュマは言った。

(2) 無意味なことと結びついた[4]自己によって, 心 (manas) は悪に至る。その心は汚れた行為を[5]為して, 大きな苦痛の中に置かれるのである[6]。

(3) 貧しくして悪をなす者たちは, 飢えから飢えへと, 苦痛から苦痛へと, 恐れから恐れへと, 死から死へと至るのである。(cf.Mārkaṇḍeya purāṇa. 14.18c-19b)

(4) 信仰篤く, 温厚で, 財産に富み, 善をなす者たちは, 喜びから喜びへと, 天界から天界へと, 安楽から安楽へと至るのである。(cf.Mārkaṇḍeya purāṇa. 14.20)

(5) 無神論者たちは, 手械をはめられて[7], 猛獣と象の危険へとそして蛇と盗賊の恐怖へと赴くのである。これより他に行く所があろうか。(cf.Mārkaṇḍeya purāṇa. 14.21)

(6) 友人 (priya) と神を客として遇するような物惜しみせぬ善き人々は, 自己をもつ者

---

1 本稿は『叙事詩の宗教哲学—Mokṣadharma-parvan 和訳研究 (II) —』(信州大学教育学部紀要第79号 1993年8月) に続くものである。略号などは前稿に準ずる。前稿以後見ることのできた論文などは以下の通りである。
Joseph Dahlmann, Die Sāṃkhya-Philosphie als Naturlehre und Erlösungslehre, Mahabhārata-Studien (II), Berlin, 1902.
Arvind Sharma(ed.), Essays on the Mahābhārata, Brill's Indological Library vol.1, Leiden, 1991.
Kenneth G. Zysk, The Science of Respiration and the Doctrine of the Bodily Winds in Ancient India, Journal of the American Oriental Society, vol.113 No.2, pp. 198-213, 1993.
なお京都大学の徳永宗雄教授からは Mokṣadharma のコンピュータ入力データを頂いた。また本稿の書式については大阪大学の伏見誠氏の尽力によっている。深甚の謝意を表したい。

2 P. gurūṇāṃ cāpi D. gurūṇāṃ vāpi

3 tad Deussen : das sage mir, o Grossvater [was daraus folgt]

4 anarthayuktena N. anarthaḥ kāmakrodhādiḥ

5 P. sa karmo D. svakarma

6 P. kleśe mahati dhīyate D. kṛcchre loke vidhīyate

7 hastāvāpena N. hastāvāpo hastanigaḍas tena nigaḍitāḥ santo

8 hastadakṣiṇam Deussen : mit tüchtigen Händen N. hastadakṣiṇaṃ hastopalakṣitena tatkartavyena dānādinā karmaṇā dakṣiṇam anukūlam

の豊かな右手の[8]道に至る。

(7) 穀物の中での空穂，翼ある動物の中での白蟻[9]，ダルマが（行為の）原因ではない人は，人間の中で[10]それと同じ種類の人である。(cf.Bötlingk, Die Indische Sprüche, No. 4150; Pañcatantra（Bombay 版）III.98)

(8) 運命は人がたいへん早く走ればその後を（早く）走り，眠っている人と共に横たわる。（運命は）それぞれの人によって為されたことに従って（振る舞うのである)。(cf.Bötlingk, op.cit., No.7138)

(9) （運命は，人が）立っていれば横に立ち，進めば後から進み，行為を行なえば行なう。（このように運命は）影のごとく従うのである。(cf.Bötlingk, op.cit., No.7139)

(10) かつてそれぞれの行為はある仕方で蓄積されたが[11]，（蓄積の仕方にしたがって）人は[12]常にその行為（の結果？）を享受する。自分によって行なわれた行為なのであるから。(cf.Bötlingk, op.cit., No.5533)

(11) 自らの行為の結果によって様々に散らばり（？）[13]，運命によって守られているこの生き物の群を，時（kāla）はすべてにわたって支配している。

(12) 花と果実は命じられなくとも自分の時節（svakālaṃ）に遅れることはないように，以前為された行為も遅れることはない。

(13) 尊敬と侮蔑，獲得と損失，消滅と生成，これらは繰り返し発生しては，運命（すなわち定まった期間）が終われば（vidhānānte）消滅する[14]。(cf.Bötlingk, op.cit., No. 6890)

(14) 苦は自分によって決められ，楽も自分によって決められているのである。人は母胎を得たのち，前世の身体が行なったことを享受するのである。(cf.Bötlingk, op.cit., No. 895)

(15) （ある人が）幼児，若者，成人として行なう善きことと悪しきことは，誕生するたびに，（幼児，若者，成人という）それぞれの段階において享受する[15]。(cf.MBh.13.7. 4cd; Bötlingk, op.cit., No.4447)

(16) 子牛が千頭の雌牛のなかで母を見つけるように，そのように前世でなされた行為は行為者のあとに従うのである。(cf.MBh.13.7.22; Pañcatantra II.125; Bötlingk, op.cit., No.5114)

(17) 最初水で湿っていた衣類は後に（洗うという）行為によって[16]きれいになる。（それと同様に）断食によって苦行を行なったものには永い終わりなき安楽がある。(cf.Böt-

9 puttikā Deussen: die Puppen; Bötlingk, Die Indische Sprüche, No. 4150: Termitten; N. puttikā maśakāḥ

10 P. manuṣyeṣu D. manuṣyāṇāṃ

11 P. samācitam D. samīhitam

12 P. eva naro D.ekataro

13 P. svakarmaphalavikṣitaṃ D. svakarmaphalanikṣepaṃ

14 P. pravṛttā vinivartante D. pravṛttāni vivartante

15 P. bhuṅkte janmani janmani D. tatphalaṃ pratipadyate

16 karmaṇā N. karmaṇā kuṣālanena

lingk, op.cit., No.6863)

(18) 苦行林において長い間苦行を実践することによって，ダルマによって罪は滅され，人々の願望は成就するのである[17]。

(19) 空中に鳥の[18]足跡は見えず，水中に魚の足跡は見えないように，認識を得た人々の道は見えない[19]。(cf.Bötlingk, op.cit., No.6342)

(20) その他の非難や罪をあげつらうことが何になろう。美しく，そしてふさわしい仕方で，自己にとって幸いとなることを行なうべし。(cf.Bötlingk, op.cit., No.638)

[175章] (D182章，6775-6803)

ユディシュティラは言った。

(1) 世界の動く者と動かぬ者のこの一切はどこから創造されたのか。また帰滅の時には，何に至るのか。祖父よ，それを私に語るべし。

(2) 海があり，空があり，山があり，雲があり，大地があり，そして火と風があるこの世界は何によって造られたのか。(=175.7)

(3) なぜ生き物 (bhūta) は創造されたのか。なぜ階層 (varṇa) は分かれたのか。なぜ階層に浄不浄があり，そしてなぜ階層にダルマとアダルマがあるのか[20]。(=175.8)

(4) 生きている者の霊魂 (jīva) とはいかなるものか。また死んだ者はどこへ行くのか。(=175.9) この世界からかの世界に (行くのか)。汝はすべてを私に語るべし。

ビーシュマは言った。

(5) ここでも人はこの古譚を例として語る。質問をするバラドヴァージャに対して，ブリグによって語られた優れた[21]話を。

(6) 偉大な聖仙ブリグがカイラーサ山の頂上に，身体の活力によって輝くかのごとく[22]座っているのを見て，バラドヴァージャは尋ねた。

(7) 『海があり，空があり，山があり，雲があり，大地があり，そして火と風があるこの世界は何によって造られたのか。(=175.2)

(8) なぜ生き物は創造されたのか。なぜ階層 (varṇa) は分れたのか。なぜ階層に浄不浄があり，そしてなぜ階層にダルマとアダルマ[23]があるのか。(=175.3)

(9) 生きている者の霊魂 (jīva) とはいかなるものか。また死んだ者はどこへ行くのか。(=175.4ab) 他の世界とこの世界の一切を汝は私に語るべし[24]。』

---

17 P. saṃsiddhyante D. saṃpadyante

18 P. śakunīnām D. śakunānām

19 P.とD.はjñānavidāṃ gatiḥであるが，Bötlingk, op.cit., No.6342ではpuṇyakṛtāṃ gatiḥとなっている。

20 P. dharmādharmāv atha D. dharmādharmavidhiḥ

21 P. śreṣṭhaṃ D. śāstraṃ

22 P. dīpyamānam ivaujasā D. dīpyamānam mahaujasam

23 P. dharmādharmāv atha D. dharmādharmavidhiḥ

24 P. śaṃsatu no bhavān D. śaṃsitum arhasi

(10) このようにバラドヴァージャによって疑問を尋ねられたブラフマンのごとき偉大な聖仙[25]である彼の尊者は，そこで彼に一切を語った[26]。

(11) 『天啓聖典に基づいて[27]，「マーナサ」という名で偉大な聖仙たちによって呼ばれ，始まりも終わりもなく分割することもできない不老不死なる神，

(12) （それは）「未開展（avyakta）」と呼ばれ，恒常にして不滅不変であり，生き物はそれから創造され，生きそして死ねのであるが，

(13) そのあらゆる存在する物を支える威光ある神は，最初に「大（mahān）」という名のものを創造した[28]。それは虚空と呼ばれる。

(14) 虚空から水が生じ，水から火と風が生じた。火と風の結合によって，その後，地が生じた。

(15) それから自存者（svayaṃbhu）によって熱力（tejas）からなる神聖な蓮が創造された。その蓮から，ヴェーダからなり，器である[29]ブラフマー神が生じた。

(16) 「自我意識」と言われるものは，あらゆる存在物の本質をなし，大きな熱力からなるブラフマー神である。それは（ya）これら五つ存在要素（dhātu）である[30]。

(17) 山は彼のブラフマー神の骨の名前である。平地は脂肪と肉である。海は彼の血であり，同様に虚空は彼の腹である。

(18) 風は呼気であり，火は体熱であり，川は血管である。アグニ神とソーマ神すなわち月と太陽は彼の両目であると伝えられている。

(19) 上方の天空は彼の頭であり，地は両足であり，方位は両腕である。（ブラフマー神は）[31]無限であるから，完成した人によっても認識するのは難しい[32]。（この点について）疑いはない。

(20) 彼こそが[33]聖なるヴィシュヌ神であり，無限であると伝えられている。あらゆる存在物の本質に存在している彼は，自己の完成していない人によっては認識するのが難しい。

(21) あらゆる存在物の生成のために自我意識を創造した者（ahaṃkārasya yaḥ sraṣṭā）[34]，それからここで汝が私に尋ねた一切のもの（viśvam）が生じたのである。』

バラドヴァージャは言った。

(22) 天空の，方位の，大地の，そして風の大きさは（parimāṇāni）どのくらいか。真に私の疑問を断ち切るべし。

---

25 P. maharṣir D. brahmarṣir

26 D. はこの後に Bhṛgur uvāca を挿入している

27 P. vikhyātaḥ śrutapūrvo maharṣibhiḥ D. yaḥ pūrvo viśruto vai maharṣibhiḥ

28 D. はこの後に次の句を挿入し，三行詩としている。
mahān sasarjāhaṃkāraṃ sa cāpi bhagavān atha //

29 nidhiḥ N. nidhir iva jñānaiśvaryādīnām

30 N. ye ete pañca ākāśādayo dhātavo dhāraṇakarmāṇaḥ sa eva brahmā

31 Duessen は acintyātmā を主語として解している。注32参照

32 P. durvijñeyo hy anantatvāt siddhair api D. durvijñeyo hy acintyātmā siddhair api

33 P. sa eve D. sa eṣa

34 あるいは，「私は（存在する）」という発声をなした者の意味か。

ブリグは言った。

(23) かの天空（ākāśa）は，無限にして，聖者（siddha）と楽人が住み[35]，さまざまな住居でにぎわう心楽しきところであり，その端には近づくことはできない。

(24) （天空の）領域の[36]上方と下方には太陽と月は見られない。そこでは神々が自ら輝き，火をエネルギーとして光を放っている[37]。

(25) 彼らもまた（ブラフマー神の）身体の精気の広がった（prathitaujas）天空（nabhas）の端を見ることはない。（天空の端は）到達するのが困難であり無限であるから，と私の言うことを理解すべし，名誉を与える者よ。

(26) かの天空は，はるか高みにまで光を放つ自ら輝く者によって満たされているので，神々（surair）によっても量ることはできない。

(27) 地の果てには海があり，海の果てには暗黒（tamas）があると伝えられている。暗黒の果てには水があり，そして水の果てにあるのは火のみであると言われている。

(28) 地下界（rasātala）の果てには水があり，水の果てには蛇の王[38]がいる。その果てには再び虚空があり，虚空の果てには，再び水がある。

(29) このように至尊者（bhagavat）の端と水の大きさは，火と風と水にもとづいて認識するのは神々（daivatair）によっても難しい。

(30) 火と風と水の，そして地の表面の色（varṇāḥ）は，天空のごとくであるが[39]，本質を観察することによって[40]区別される（bhidyate）。

(31) そして，もろもろの聖者（muni）はさまざまの聖典（śāstra）において，三界と海の[41]大きさは同様に（? yathā）規定されると説いている。しかし，到達できない不可見のもの（adṛśya）にたいして，誰が大きさを語れようか[42]。

(32) 聖者（siddha）と神々（devatā）の領域（gati）は限定されている時，名前にふさわしい姿をした偉大な自己をもつ限りなきマーナサについて，「限りなき」と伝えられる名称は，譬喩として用いられている（gauṇa）のである[43]。

(33) 神聖なその姿が[44]縮小し，そしてまた増大するならば，他の誰がそれを認識することができようか[45]。たとえ，他の者がそれと同じ種類に属する[46]としても[47]。

(34) かの蓮の花から創造され，一切知者にして，身体をもち（mūrtimān），主であるブラ

35 P. siddhacāraṇasevitam D. siddhadaivatasevitam
36 gater N. gateḥ sūryaraśmigater api Duessen: (oberhalb) ihres Machtbereiches
37 P. bhāsvarāś ca D. bhāsvarābhā
38 P. pannagādhipaḥ D. pannagādhipāḥ
39 P. ākāśasadṛśā D. ākāśād avagṛhyante
40 tattvadarśanāt N. atattvadarśanāt
41 P. trailokye sāgare caiva D. trailokyasāgare caiva
42 P. は三行詩であるが，D. は二行詩である。
43 P. は三行詩であるが，D. は二行詩と一行詩に分かれている。
44 P. tadrūpaṃ D. yadrūpaṃ
45 P. śakto D. śakyo
46 tadvidho 'pi N. tadvidho 'pi brahmabhāvaṃ gato 'pi
47 P. は二行詩であるが，D. は一行詩である

フマンは，ダルマからなる最初のそして最高の造物主（prajāpati）である。

バラドヴァージャは言った。

(35) もしも（ブラフマンが）蓮の花から生じたならば，蓮の花がより古い。しかし汝は，ブラフマンが最初に生じたと言った。これが私の疑問である。

ブリグは言った。

(36) マーナサのこの世でブラフマンたることに伴う（samupāgatā）身体（mūrti）の座る場所を置くために，地が蓮と言われたのである。

(37) その蓮の果皮が[48]天空を押し上げている[49]メール山である。その（メール山の）中腹にいる人々の主が，もろもろの世界を創造したのである。

［176章］（D183章，6804-6820）

バラドヴァージャは言った。

(1) メール山の中腹に座したるかの主ブラフマーは，どのように種々の生き物の創造をなしたか，それを私に語れ，すぐれた再生族よ。

ブリグは言った。

(2) 種々の生き物の創造をマーナサは心（manas）によってなした。生き物に生命を与えるために[50]最初に水が創造された。

(3) あらゆる生き物にとって生命（prāṇa）であるもの，それによって生き物は[51]成長し，去られた者は消滅するもの，それによってこの世の一切は覆われているのである。

(4) 地，山，雲そして他の，形態をもつ物はすべて水からできていると知るべし。水こそが[52]（それらを）支えたのである。

バラドヴァージャは言った。

(5) どのように水は生じたのか。そして火と風はどのように生じたのか。また地はどのように創造されたのか。ここに私の大きな疑問がある。

ブリグは言った。

(6) バラモンよ，かつてブラフマー神の世界期（brahmakalpa）においてバラモンの賢者たちが集った時に，偉大な自己をもつ彼らに，世界の生成についての疑問が生じた。

(7) かの再生族たちは，瞑想を始め，沈黙を遵守し，動くことなく，食事もとらず，風を飲んで，神々の百年を過ごした。

(8) 彼らすべての耳にダルマからなる[53]音声（vāṇī）が達した時に，聖なる言葉（sarasvatī）が天空の表面から生じた。

---

48 P. karṇikā D. karṇakā
49 P. ucchritaḥ D. ucchitaḥ
50 samdhukṣanārtham D. saṃrakṣaṇārthaṃ
51 P. yatprāṇāḥ D. yatprāṇaḥ
52 P. punaḥ D. yato
53 P. dharmamayī D. brahmamayī
54 P. stimitaniḥśabdham ākāśam D. stimitam ākāśam anantam

(9) それ以前は，音声なく寂静にして山のごとき虚空が[54]，月，太陽，風も消えて，眠っているかのごとく存在していた。

(10) それから，あたかも暗闇の中に別の暗闇が生じるかのように，水が生じた。その後，その水を圧縮することによって風が生じたのである。

(11) 割られないかぎり音のないように見える壷を，水が満たされると，風は音あるものにするのと同様に，

(12) すきまなく（nirantare）水に覆われた虚空の端で，波の表面を破って，風は轟きを伴って上昇するのである。

(13) 波を圧縮することによって生じたこの風は動き回り，虚空に場所を得た後も（ākāśasthānam āsadya），静まることはない。

(14) 風と水が擦り合わさった時，熱（tejas）によって輝き，大きな力をもち，頭を上方に向けた者（火）が，虚空を暗闇なきもの[55]となして，生じた[56]。

(15) 火は風（pavana）と結合して虚空から水を持ち上げた[57]。その同じ火は，風（māruta）と結合することによって固体性を生じた。

(16) その火には（tasya）虚空に[58]落ちた別の水（sneha）があり，それが凝集性を得て，地の性質に近づいた[59]。

(17) もろもろの味，あらゆる香り，もろもろの湿潤さ（snehānāṃ）にとって，そして同様にもろもろの生き物にとって，地はそこにおいて一切が生じる母胎である，とここにおいて認識すべし。

［177章］（D184章，6821-6865）

バラドヴァージャは言った。

(1) これらが[60]ブラフマー神が最初に創造した五つの存在要素（dhātu）である。粗大元素（大種）と呼ばれる[61]それらによってこのもろもろの世界は充たされている（āvṛtā）。

(2) かの偉大なる心を持つものが何千という存在物を創造した時に，どうして五つにのみ要素という性質（bhūtatva）が生じたのか。

ブリグは言った。

(3) 「量ることのできないもの（amita）」に対して「大」ということばは（用いられる）。（それらによって）存在物は誕生に赴くのである[62]。従って，それらにとってこの大種ということばが生じたのである。

---

55 P. vitimiraṃ　D. nistimiraṃ
56 P. prādurbhavati　D. prādurabhūd
57 P. khāt samutpatate jalam　D. khaṃ samākṣipate jalam
58 P. ākāśe　D. ākāśam
59 P. upagacchati　D. anugacchati
60 P. ete te　D. ta ete
61 P. mahābhūtābhisaṃjñitaiḥ　D. mahābhūtābhisaṃjñitāḥ
62 yānti bhūtāni saṃbhavam　N. yataḥ saṃbhavaṃ yānti tato hetor bhūtānīty arthaḥ

(4) 風は運動であり，虚空は広がり（kham）であり，火は熱，水は流動，そして地は凝集である。身体は（これら）五つの存在要素からできているのである。

(5) 以上のように，動く者と動かぬ者はこれら五つの存在要素（bhūta）と結びついているのである。耳，鼻，舌，皮膚，そして眼は感官と呼ばれる。

バラドヴァージャは言った。

(6) しかし，動く者と動かぬ者が五つの存在要素（bhūta）と結びついているならば，動かぬ者の身体には五つの存在要素（dhātu）は見られない（ではないか）。

(7) 熱はなく，動きはないが本質的に凝集的なものである木々の身体には五つの存在要素（dhātu）は知覚されない。

(8) （木々は）聞くことはなく，見ることもない。それらは香りと味を知る者ではない。そして（木々は）接触を認識しない。それらがどうして五つの存在要素からなるもの（pañcabhautika）であるのか。

(9) 木々は流動せず，火もなく，地もなく[63]，風からなるものではない，また虚空は（木々に）限定されないのであるから[64]，木々は存在要素からなるものではない。

ブリグは言った。

(10) 凝集的であっても木々に虚空は存在する。（この点について）疑いはない。（なぜならば）木々の花と果実の中に（虚空が）現われることは[65]いつも知覚される[66]（から）。

(11) 木々は熱によって葉は色褪せ[67]，（木々の）樹皮，果実そして花は冷気によって[68]色褪せる。従って，ここには触感が存在する。

(12) 風や火や雷鳴の衝撃によって[69]果実と花[70]はしぼむ。（これは）音が耳で捉らえられているからである。従って，植物は音を聞くのである。

(13) 蔓は木に巻きつき，あらゆるところに進行する。視覚のない者には進行はないのであるから，植物は見るのである。

(14) 良きあるいは悪しき香りによって，またさまざまな薫り（dhūpa）によっても，病むことがなければ，花は咲く。従って，植物は匂いを嗅ぐのである。

(15) （木は）病気の時でも根で水を飲むことが観察され[71]，そして病気は治癒するのであるから，木には味覚が存在する。

(16) 植物は，青蓮の茎という口を通って水を上方へ運ぶように，そのように植物は，風と結びついて，根によって水を飲むのである。

---

63 P. abhaumatvād D. abhūmitvād
64 aprameyatvād N. aprameyatvād apratīyamānatvāt
65 P. puṣpaphale vyaktir D. puṣpaphalavyaktir
66 P. samupalabhyate D. samupapadyate
67 P. glānaparṇānāṃ D. glāyate varṇaṃ
68 P. caiva śītena D. śīryate cāpi
69 P. -niṣpeṣaiḥ D. -nirghoṣaiḥ
70 P. phalapuṣpaṃ D. phalaṃ puṣpaṃ
71 P. salilapānaṃ ca vyādīnām api darśanam D. salilapānāc ca vyādhīnām api darśanāt
72 P. grahaṇāt sukhaduḥkhasya D. sukhaduḥkhayoś ca grahaṇāc

(17) （木々は）快と苦を捉らえるのであるから[72]，また傷ついたものが成長するのであるから，私は木々に霊魂（jīva）を見る。（従って）木々に意識がないこと（acaitanya）はないのである。

(18) それ（木）によって引き上げられたその水を火と風が消化する（jarayati）。そして食物の変化によって，粘性（sneha）と成長が生じる。

(19) そして，あらゆる動く者の身体には五つの存在要素（dhātu）が存在する。それらによって身体は活動するのであるが，それら五つの存在要素は一つずつ区別される。

(20) 皮膚，肉，骨，骨髄，そして五番目が腱[73]。このようにここで，身体において地からなるものが列挙された[74]。

(21) 身体の輝きは火である[75]。怒り，目，体熱も同様である。そして火は消化も[76]する。（以上が）生きている者（śarīrin）の火に関係する五種のものである。

(22) 耳，鼻，次に[77]口，心臓，そして内臓，これらは生きている者（prāṇin）の虚空よりなる五つの組織（dhātu）である。

(23) 粘液，胆じゅう，汗，脂肪，血というように，生きている者の身体には常に水が五通りに存在する。

(24) 生きている者は，プラーナによって行為し，ヴィヤーナによって努力する。アパーナは下方に[78]行き，サマーナは心臓に留まっている。

(25) （生きている者は）ウダーナによって深呼吸をする。そして，（五種の風の）相違によって[79]話すのである。以上のように五種の風がこの世で生きている者（dehin）を活動させるのである。

(26) 生きている者（śarīravān）は，地から香という性質（guṇa）を知り，水から味を知る。目によって光を見[80]，風によって[81]触感を知るのである[82]。

(27) 私はその香の性質（guṇa）を個別に列挙して語るであろう。好ましい香と好ましくない香，甘美な香，刺激臭，

(28) かび臭さ（nirhārin），混合した匂い（saṃhata），湿っぽい匂い（snigdha），乾燥した匂い（rūkṣa），ふくよかな匂い（viśada），このように地に属する香は詳細には九種であると知るべし[83]。

---

73 P. snāyu ca　D. snāyuś ca
74 P. saṃkhyātaṃ　D. saṅghātaṃ
75 P. agniś ca　D. hy agnis
76 P. cāpi　D. yac ca
77 P. atha　D. tathā
78 P. avāk ca　D. adhaś ca
79 pratibhedāt　N. pratibhedād uraḥkaṇṭhaśiraḥsthānabhedāt
80 P. jyotiḥ paśyati cakṣurbhyāṃ　D. jyotiṣā caksusā rūpaṃ
81 P. vāyunā　D. vāhinā
82 D. はこの後に次の句を挿入している。
　gandhasparśo raso rūpaṃ śabdaś cātrta guṇāḥ smṛtāḥ /
83 この後に D. は P.26cd 句を挿入している。
84 P. apāṃ guṇāḥ　D. api guṇāḥ

(29) 音声，触感，色，そして味が水の性質[84]であると伝えられている。私は，味についての知識を語るであろう。それについて私が語るのを聞け。

(30) 味には多くの種類があるとよく知られた（prathitātmabhiḥ）賢者たちによって[85]説明された。甘さ，塩辛さ，苦さ，渋さ，酸味，辛さ，とこのように水の味は六種が列挙されると伝えられている[86]。

(31) 火（jyotis）は音声，触感，色という三つの性質をもつと言われている。眼（jyotis）はもろもろの色を見る。そして色はまたさまざまに伝えられている。

(32) 短い，長い，大きい，四角な，小さい（aṇu），丸い，白い，黒い，赤い，青い，黄色い，そして褐色[87]，とこのように火の色の性質は十二種類列挙される[88]と伝えられている。

(33) 次に，音声と触感が知られるべし。風は（この）二つの性質をもつと言われる。しかし，風の性質は触感であり，そして触感はさまざまに伝えられている。

(34) 刺すような，速やかな，おだやかな，べとついた，弱い、激しい，暖かい，冷たい，心地よい，苦しい，油っぽい，ふくよかな[89]，とこのように風の性質は十二列挙されると言われている。

(35) 虚空は一つの性質をもつ。それは音声であると伝えられている。私はその音声の多様な詳細について語るであろう。

(36) 第一音（具六ṣaḍja），第二音（ṛṣabha）と第三音（gāndhāra），第四音（madhyama），第五音（pañcama）[90]，第六音（明意 dhaivata）[91]そして第七音（niṣādaka）[92]が知られるべきである。

(37) この七種が虚空の目印[93]である性質と言われている。それは，三種の音調からなるものとして[94]太鼓などあらゆるところに存在しているのである[95]。（cf.Pāṇinisūtra 1.2.

---

85 P. sūribhiḥ D. ṛṣibhiḥ

86 D. は「とこのように水の味は…と伝えられている」の句を新たな詩節の ab 句としている。従って、以下 P. と D. は一行ずつずれる。

87 P. nīlaḥ pīto 'ruṇas D. pīto nīlāruṇas D.はこの後に次の句を挿入している。
kaṭhinaś cikkaṇaḥ ślakṣanaḥ picchalo mṛdudāruṇaḥ /

88 P. dvādaśavistāro D. ṣoḍaśavistāro

89 P. kaṭhinaś cikkaṇaḥ ślakṣanaḥ piccchalo mṛdudāruṇaḥ /
uṣṇaḥ śītaḥ sukho duḥkhaḥ snigdho viśada eva ca //
D. uṣṇaḥ śītaḥ sukho duḥkhaḥ snigdho viśada eva ca /
tathā kharo mṛdū rūkṣo laghur gurutaro 'pi ca //

90 P. pañcamas D. dhaivatas

91 P. dhaivatas D. pañcamaś

92 P. niṣādakaḥ D. niṣādavān

93 P. ākāśalakṣaṇaḥ D. ākāśasaṃbhavaḥ

94 P. traisvaryeṇa D. aiśvaryeṇa

95 D.はこの後に次の詩節を挿入している。
mṛdangabherīśaṅkhānāṃ stanayitno rathasya ca /
yaḥ kaścic chrūyate śabdaḥ prāṇino 'prāṇino 'pi vā /
eteṣām eva sarveṣāṃ viṣaye saṃprakīrtitaḥ /
evaṃ bahuvidhākāraḥ śabda ākāśasaṃbhavaḥ /

32)

(38) 人は，虚空より生じた音声を，これら風の性質が対立しなければ，それらと共に知覚し，（風の性質が）調和しなければ[96]認識しない，と言われている。

(39) これらの存在要素[97]は常に（他の）存在要素と共に[98]増大する。（五種のうち）水と火と風は，生きている者（dehin）において常に目を覚ましているのである[99]。

［178章］（＝D185章，6866-6882）

バラドヴァージャは言った。

(1) 地の存在要素（dhātu）に依存して[100]，体の中の火はどのように存在するのであろうか[101]。（体の中の）場所の特殊性によって，風はどのように作用するのであろうか。

ブリグは言った。

(2) バラモンよ，私は汝に風の進行を語るであろう[102]，罪なき者よ。力ある風は，生き物（prāṇin）の身体をどのように動かすのか（を語るであろう）。

(3) 火は身体を保護しつつ，頭の中に位置している。プラーナ（気息，prāṇa）は頭の中と火の中に存在して（身体の中を）動くのである。

(4) それ（プラーナ）はあらゆる生き物の本質であり，永遠なるプルシャであり，心（manas）であり，理性（buddhi）であり，自我意識（ahaṃkāra）であり，存在要素（bhūta）であり，外的対象でもある。

(5) そのように，この世界では，それは（sa 生き者は？）あらゆるところでプラーナによって保護されている[103]。後に[104]（プラーナは[105]）サマーナによってそれぞれの場所（gati）に至るのである。

(6) 腹[106]と腸と（消火の）火の中に住むアパーナは，小便と大便とを運びつつ（体内を）巡るのである。

(7) 努力（prayatna），行為（karma），力（bala）という三つの中に存在する（vartate）単一なものを，最高我（adhyātman）を知る人々はウダーナと言った。

(8) 同様にあらゆる関節（sandhi）に入り込んだ風は，人間の身体においてはヴィヤーナ

96 P. viṣamāgataiḥ D. viṣamasthaiḥ
97 dhātavaḥ N. te śabdādyutpādakā dhātavo dehāraṃbhakās tvagādigolakāḥ
98 dhātubhiḥ N. dhātubhiḥ prāṇendriyair
99 D. はこの後に次の句を挿入している。
mūlam ete śarīrasya vyāpya prāṇān ihāsthitāḥ /
100 P. āśritya D. āsādya
101 P. bhavet D. prabho
102 P. kīrtayiṣyāmi D. kathayiṣyāmi
103 P. paripālyate D. paricālyate
104 pṛṣṭhatas N. pṛṣṭhato jīvatvaprāptyantaraṃ
105 Deussen : jeder [der fünf Prāṇa's]
106 P. vastimūlaṃ D. bastimūlaṃ N. bastimūlaṃ mūtrāśayaṃ
107 dhātuṣu N. dhātuṣu tvagādiṣu

というように教示されるのである。

(9) 諸ダートゥ（身体要素 dhātu）の中に[107]広がっている火は，サマーナによって動かされ，諸のラサ（養分 rasa[108]），ダートゥ，そしてドーシャ（気質 doṣa）を作用させつつ存在している。

(10) アパーナとプラーナの中間で，プラーナとアパーナによって規制され（samāhita），集中した（？）[109]火は，適当な場所で[110]，すべてを（samyak）消化する。

(11) 口に始まり[111]，肛門に至る[112]管（srotas）は，最後には（ante）グダと呼ばれるのであるが，その管から生きている者（dehin）のあらゆる管が生じるのである。

(12) （管と）プラーナが出合うことから，（管と火との）出合いが[113]生じる。生きている者（dehin）の食物を消化する熱は火であると知るべし。

(13) 火の勢いを運ぶプラーナは，管の末端でぶつかり，再び上方に至って火を放出するのである（？）[114]。

(14) 消火したものの入れ物（pakvāśaya）はへその[115]下に，未消化のものの入れ物はへその上にある。あらゆるプラーナはへそという身体の中心に位置しているのである[116]。

(15) 心臓から延びる[117]十種の脈管（nāḍī）はすべてプラーナに[118]駆り立てられて，食物の精髄（rasa）を横・上方・下方へと運ぶのである。

(16) さてこれが[119]諸々のヨーガの道[120]であり，それを通って（ヨーガ行者たちは）その境地に（tatpadam）おもむく。疲労を克服して座る賢者たちは[112]自己を頭頂に保ったのである[122]。

(17) このように，生きている者にとって（dehinām），あらゆるプラーナとアパーナに分けられた（vihitaḥ）火は，常に頭の中に存在する[123]。あたかも燈火の皿に置かれた[124]火のように。

---

108 rasān N. rasān annādīn

109 samanvitaḥ N. samanvitaḥ samāśritaḥ … / yadvā / samanvita ekībhāvena yuktaḥ samānatvaṃ gata ity arthaḥ /

110 P. svadhiṣṭhānaḥ D. tv adhiṣṭhānaṃ

111 āsyaṃ N. āsyam ārabhya

112 P. pāyusaṃyuktam D. pāyuparyantam

113 sannipātaḥ N. tatsahacāriṇo jāṭharavahner api sannipātaḥ

114 samutkṣipati Deussen: schürt er [seinerseits] das Feuer an

115 P. nābher D. nābhyām

116 P.samāhitāḥ D. ca saṃsthitāḥ

117 P. prasṛtā D. prasthitā

118 N.はdaśaprāṇapracoditāḥと解して、十種のプラーナを列挙している。 N. te ca prāṇādayaḥ pañca nāgakūrmakṛkaladevadattadhanañjayāś ca pañca

119 eṣa N. eṣa āsyādipāyuparyanto

120 mārgo 'tha yogānāṃ N. yogānāṃ yogināṃ mārgam

121 P. jitaklamāsannā dhīrā D. jitaklamāḥ samādhīrā

122 P. ādadhuḥ D. ādadhan

123 P. sthito D. samidhyate

124 P. samāhitaḥ D. āhitaḥ

［179章］（＝D186章，6883-6897）

バラドヴァージャは言った。

(1) もし風が生きるのであれば[125]，風こそが活動し，呼吸し，そして話すのである。従って，霊魂（jīva）は無意味となろう。

(2) もし[126]体熱（ūṣmabhāva）は火に属し，もし火によって消化が行なわれるならば，老化するのもまた[127]火である。従って，霊魂（jīva）は無意味となろう。

(3) 人が[128]滅する時，霊魂は知覚されない。（その時は）風がそれを離れ，体熱が消滅するのである。

(4) もし霊魂が風のようであれば[129]，あるいは霊魂は風と結びつく（saṃśleṣa）のであれば，霊魂は，つむじ風のように見え，風の群と共に行くであろう。

(5) もしも（霊魂が）風と結合するならば，またもしも（霊魂は）その結合の故に滅するのであれば，大海から切り離されている故に（?mahārṇavamimuktatvād）水の容器は（大海とは）別である（のと同様である。）

(6) 井戸に水を，あるいは燈火に火を与えてみよ。投げ込まれたものはすぐに滅するであろう[130]。それと同様な仕方でこれ（霊魂）も滅するのである。

(7) この身体が五種のものを共通の基盤とする[131]時，どこに霊魂は[132]存在しようか。それらの[133]いずれか一つの除去による[134]四種の集合は[135]存在しないのであるから。

(8) なぜならば（体内の）水は食事をとらなければ滅し，風は呼吸を停止すれば滅する。虚空は胃を開けば（koṣṭabhedāt）滅し，火は食事をとらなければ滅し，

(9) そしてまた病気・傷害[136]・疲労によって地は壊れる。これらのうちいずれか一つがそこなわれれば，これらの集合は五種に分れる。

(10) これ（身体）が五種になった時，霊魂は何の後に従うのであろうか。あるいは霊魂は何を知らせるのであろうか。また，霊魂は何を聞き，話すのであろうか[137]。

(11) 「この牛は他の世界にいる私を救うであろう」，と言って，（牛を）贈った後でその人が死んだならば，その牛は誰を救うのであろうか。

(12) 牛，そしてそれを受取る人と贈る人は等しくまさにこの世で消滅する。彼らはどこで（再び）会う（samāgama）というのか。

---

125 prāṇayate N. prāṇayate jīvate
126 P. yadi D. yad
127 P. caiva D. caitat
128 jantoḥ N. jantoḥ dehendriyabuddhisaṃghātasya
129 P. vātopamo D. vāyumayo
130 P. prakṣiptaṃ naśyati kṣipraṃ D. kṣipraṃ praviśya naśyeta
131 P. pañcasādhāraṇe D. pañcadhāraṇake
132 jīvitaṃ N. jīvitaṃ jīvaḥ
133 P. yeṣām D. teṣām
134 P. anyataratyāgāc D. anyatarābhāvāc
135 P. saṅgrahaḥ D. saṃśayaḥ
136 P. -vraṇa- D. -varṇa-
137 P. bravīti vā D. bravīti ca

(13) 鳥に食べられた[138]人や，山の頂上から落ちた人や[139]，火によって焼かれた（upayukta）人は，なぜ再び生存（saṃjīvanam）できるのか。

(14) 切られた木の根は再び成長せず，その種子が活動するのであれば，死者はどうして再び戻って来られるのか。

(15) 循環するのは最初に創造された種子のみである。死者は死ぬたびに滅し，種子から（新たな）種子が活動するのである。

（1993年11月30日　受理）

138 P. upayuktasya　D. upabhuktasya

139 P. patitasya vā　D. patitasya ca